

---

# 病室のメリークリスマス

霧島美月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

病室のメリークリスマス

### 【Nコード】

N6798P

### 【作者名】

霧島美月

### 【あらすじ】

姉と過ごした最後のクリスマス。

その病室は、私たちの居た時間をずっと覚えている

。

姉の病室にあるベッドは、白く小奇麗に整っている。

今年のクリスマスは、温暖化などと騒がれている近年にしては、めずらしくも雪が降っているようだ。

……そう、確かあの年も雪が降っていた。

12月25日はクリスマスにして、私の誕生日。でも、誕生日が同じだからと言って、私は神様にはなれなかったんだ。

私には、4つ歳の離れた姉がいた。

元々活発な少女だった姉は、インドア派な私をよく外に連れ出した。

私は元々運動が苦手だったし、家の中で本を読むのが好きな子供だった。だから、無理に外へ連れ出す姉が大嫌いだった。口は悪いし、凶暴だし、だらしないし。おまけに私の物を勝手に食べたり、とったりする。

「とりゃー、腕相撲しろ、ばか弟！ 見ろ、バスケで鍛えたこの豪腕！！ …… 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10！！ アタシの勝ち」

「うわあああん、お母あああああん！！」

物心つく頃から、姉とはケンカしていた記憶しかない。

そんな姉が高校生、私が中学生だったある日、姉は具合が悪くな  
って咳をした。胸を抱えて「痛い痛い」と唸っている。ちょうどそ  
の頃は季節性の風邪が流行っていた為、私達家族は病院にも行かず  
に家で療養させていた。

普段から力でも敵わない姉が弱っているのを見ると、私は少し気  
分が良かった。今思えば酷い話だが、それほどまでに姉を憎んでい  
たのだろう。

しかし、2、3日しても姉の咳は止まらなかった。

心配に思った両親は病院で姉を診察して貰ったが、診察の結果は  
驚くべき内容だった。

『悪性新生物』……要するにガンだ。

咳をしていたのは肺にガンが出来たからでは無く、既に全身の何  
処から転移し、肺ガンの症状がやっと表立って出て来ただけのこと  
だった。

その日から、姉は入院した。

抗ガン剤の副作用は凄まじく、姉の自慢だった長い黒髪は全て抜  
け落ちてしまった。カツラなら自由にコスプレ出来るな、などと  
冗談を言っていた。……私は笑うことも出来ずに、ただその様子を  
じっと見つめていた。

食事ほとんど吐いてしまったため、点滴を付けて何とか栄養を摂

る状態が続いた。

私は姉に腕相撲を挑んだ。もしかしたら、今なら勝てるかも知れない。それに、負けたら負けたで姉を励ますことが出来ると思ったからだ。

「ほお、病人のアタシなら勝てると思ったか？ 身の程知らずめ」  
「うるさい、行くぞっ！！」

姉の圧勝。台に拳が叩き付けられて激痛が走る。

「いつてええ！！ くそう、こんなに元気ならさっさと退院しろよなっ！」

「言われなくてもそうするよっ！！」

その後も度々姉に腕相撲を挑んだが、一度も勝てなかった。

……いつしか、その腕相撲が私達の健康チェックになっていった。医者からは身体に負担がかかると止められたが、面会する度に戦った。その度に私は右手の甲にアザを作って帰った。

私はそうして姉のビクともしない腕の強さを見て、よし、まだ元気だと安心した。

不思議な物だ。憎くて仕方の無い相手のはずなのに、一方では気にかけるなんて。

……だが、そんな一見元気そうな見た目とは裏腹に、姉の病気はどんどん進行していった。

姉の腕は、まさに骨だけと言った感じで今にも折れてしまいそうになった。

この頃から、姉は使いこなせないケータイを必死に練習し始めた。姉は不器用な上に機械オンチなので、簡単なメールを一件打つのに10分以上かかる。

姉はベッドでウンウン唸りながら必死に操作を覚えていた。

……そして11月のある日、ついに恐れていた事態が起こった。

学校を終えてから姉の病院に寄るのが習慣になっていた私は、その日の放課後、いつも通り仕度を始めた。その時、ケータイに受信メールが一件。

『お姉ちゃんきとくのですぐに病院に繰るように』

母から届いたメールは誤字脱字だらけで、簡素な物だった。それが、事態の深刻さをより鮮明に描き出す。

私は数えるほどしか乗ったことの無いタクシーに乗り、病院へと向かった。

お金はほとんど持っていなかったが、事情を察してくれた壮年の運転手は一気に病院へと飛ばしてくれた。

病院での受付の看護師の話は良く覚えていない。とにかく姉の部屋まで全速力で駆け抜けた事しか。

廊下には、親類達がすすり泣きをしながら集まっている。

私が到着した時、既に姉の顔には白い布が掛けられていた。

「な、何寝てるんだよ。……も、もう一度腕相撲してよ、ま……まだ、勝ってないよ……。ずるいよ……勝ち逃げなんて……！ お、お姉ちゃあああぁん！……」

握り締めた姉の手は、悲しいほどに細く、冷たかった。

12月24日午後11時58分

私が姉の死から少しずつ立ち直りつつある頃。いや、現実には全く立ち直れてなどいなかったのだが、部活や勉強に打ち込む事で寂しさを紛らわそうとしていた、その頃。

外には例年に無いほどの雪が、しんと積もっている。私は寒い廊下で白い息を吐きながら、ゆっくりと家の中を歩いていた。

……ふと気が付くと、何故か姉の部屋に来ていた。部屋は姉が使っていたままになっている。

本当は片付ける方が死んだ人の供養になると聞いたが、両親はショックでとてもそんなことは出来ない、といった様子で、そのままにしてある。

突然、ケータイのメールの着信音が響いた。こんな時間に一体誰からだろう？

ケータイを開く私。

……それは、有り得ない差出人からだった。



受信メール一件 <12月25日 0時00分>

差出人

姉

件名

無題

本文

今日はメリークリスマスだね、バカ弟。……ん？ ああ、覚えてるよ。お前の誕生日でしょ。

あの日は大騒ぎだったなあ。アタシは幼いながらに、ちやほやされているお前が憎らしかったよ。親戚から何まで皆アタシのことは放ったらかしさ。アタシはしばらく一人で遊ぶことしか出来なかったんだ。母さんも共働きの留守がちだし、イライラしたアタシはお前をぶつとばしたくなったんだよね。

……ゴメンな。

本当は、一緒に仲良く遊んで、一緒に出かけて、一緒に誕生日ケーキでも食べたかったんだ。

でも、それももう叶いそうに無いね。いつか謝ろうと思ってたんだけど、ホラ、アタシ不器用だからさ。なんかこっ恥ずかしくて。

今までアタシのせいで本当に迷惑かけた。ホントごめん。

こういう事言うのは照れくさいけど、最期に謝らせてください。せめて今日ぐらいは自分の好きな所へ行つてね。アタシの見舞いも無いから、もう君は自由だぜ！（笑）

……腕相撲、強くなったね。実はアタシ、お前にイカサマしてた。シャツで見えない肘の辺りにサポーターしたりしてな。普通にやったら多分負けてた。でも、それじゃアタシのプライドに傷が付くからね！

それじゃバイバイ。向こうでお前と腕相撲出来る日をゆっくり待ってるとするよ。

今までの一生を、本当にありがとう。私の分まで、元気で生きろよ。

( . . . END . . . )

ケータイを手にしたまま、呆然と立ち尽くす私……。

涙が止め処なく溢れる。

イカサマ？ ……嘘だ。姉はイカサマを好んではような性格ではない。

姉は……自分が負けると私が心配すると思って、元気なフリをしていたのだ。もう自分の命が長くないことを悟って……。

最期まで、本当に最期まで、弟の前では笑顔で居ようとしたのだ。

私は急に姉との日々が懐かしい物のように思えた。死ぬ時以外は走馬灯と言う表現は適さないかも知れないが、確かに走馬灯のように、姉と生きていた時間が、私の目の中を駆け巡った。

……私は涙を拭くと、ポツリと独り言のように呟いた。

「ありがとう、やっと仲直りできたね。お姉ちゃん……」

部屋に飾ってある遺影が、少し笑ったような気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6798p/>

---

病室のメリークリスマス

2010年12月30日23時55分発行